新見公立大学紀要　第43巻
pp. 129－135, 2022

研究ノート

キミ子方式を用いた子どもの絵画活動の指導法

－A認定子ども園5歳児「船の絵を描こう」の活動記録から－

岡本直行[1)]*・八子美代子[2)]・蓮沼　唯[2)]

1）新見公立大学健康保育学科　2）認定子ども園泉幼稚園

（2022年9月21日受付、11月16日受理）

本稿は、認定子ども園A幼稚園の絵画活動「船を描こう」の指導案や活動記録の内容を調査し、キミ子方式を用いた絵画活動の指導法が子どもに与える影響や育ちについて考察したものである。A幼稚園の活動には、子どものペースを重視した体制作りや子どもの意思に任せ個々に時間を調整する指導、会話を通して子どもの困難に寄り添う指導、子どもとともに描画し作品を完成させる指導等、指導の工夫が見られた。

キミ子方式等の描画法を子どもの表現活動に生かすことは、画一的な作品や個性のない作品を生む可能性があるものの、子どもの実態に沿うことに重点を置いた計画的な指導案や体制づくりの工夫によって、作品に自由を与えること、子どもの感動や発見、満足感等を与える活動となることが分かった。このように、キミ子方式のよさを子どもの実情に合わせアレンジされた指導法によって、子どもの心に寄り添い満足感を与える絵画活動の実践が可能となる。

（キーワード）描画指導法、キミ子方式、子どもの絵画活動、保育現場

1．研究の目的と方法

1）目的と方法

本稿の目的は、キミ子方式を用いた子どもの絵画活動の指導法について、保育現場での実践を通して考察することである。

キミ子方式とは、松本キミ子が1970年代に考案した描画指導法である。小中学校の代替教員時代に、絵の描けない子どもと接したこと、自分が行った授業がうまくいかなかったこと等から、試行錯誤を繰り返し考案された。その後、小・中・高等学校の教師による講習会でキミ子方式が紹介され、全国的に広まった。

キミ子方式の特徴としては、「道具、題材、描き方が決まっていること」「使用する絵の具を赤・黄・青の三原色と白の4色に限定し混色して自分の色を作ること」「植物・動物・人工物をモデルとし、その成長や製造の順に従って観察しながら描き進めること」「構図は描かれた絵の大きさに合わせて画用紙を継ぎ足す、余白の部分を切り取る等によって決めること」が挙げられる。

これまで、描画法や子どもの描画活動に結びつく実践的な書籍は多く出版されてきたが、保育現場におけるキミ子方式の実践を基にした内容や指導法については、造形教育の研究対象としてはほとんど見られない。

そこで、本研究では、キミ子方式の出版物、キミ子方式に関する文献、キミ子方式を用いた絵画活動を実践する、認定子ども園A幼稚園（以降、A幼稚園）の「船の絵を描こう」の指導案、活動記録を用いる。それらの記述を確認し、A幼稚園の絵画活動の内容や方法と子どもの育ちについて考える。

2）倫理的配慮

今回取り上げるA幼稚園の指導案、活動記録等については、本研究に使用することを園長、幼稚園教諭の先生方に事前に説明資料を用いて説明し、ご理解、ご同意をいただいた上でご提供いただいたものである。また、園名、活動の画像、子どもの作品の画像の使用に関しても許可をいただいている。

2．絵画活動「船の絵を描こう」のねらい

A幼稚園で実践されている、キミ子方式を活用した絵画活動の事例として、「船の絵を描こう」の活動を取り上げる。この活動はA幼稚園に通う子どもが取り組む絵画制作や造形表現の活動の中で、キミ子方式と出会う2度目の場である。

活動のねらいは、指導案（表1）にあるように、①描き始めを決め隣り隣りへと見た通り描くと、自然と描けてしまうことを体験すること、②船の部品、付属品の存在や特徴を知ることで、大抵のものは描けてしまうことを知ること、③船の特徴や仕組みに興味を持ち、絵に描くことを楽しむこと、の3点である。準備物は、実際に波止場に出かけ

*連絡先：岡本直行　新見公立大学健康科学部健康保育学科　718-8585　新見市西方1263-2

て絵画活動を行う時に使用するブルーシート、画板、画用紙(子どもたちが海と空の色をを塗ったもの)、オイルクレヨン黒１本、手拭き、活動や船の状態を記録するカメラ、熱中症対策用の水筒と帽子である。

活動中の子どもの姿としては、①自分の見たもの、好きなものを絵で表現することを楽しむこと、②まんてんカラー(絵の具)やオイルクレヨン、カラーマジック等、様々な画材を自ら選び、用いて表現すること、を挙げている。

キミ子方式を用いた活動で使用する絵の具は、子どもの絵本等を取り扱う株式会社フレーベル館が、４歳から6歳の幼児向けに開発した「まんてんカラー（固形水彩絵の具）」である。絵の具に加える水の量で色の濃淡やにじみ、ぼかしといった表現が可能であり、水彩絵の具を初めて使用する子どもにとって扱いやすい絵の具といえる。A幼稚園では、子どもの描画活動やキミ子方式を用いた絵画活動「鳥の絵を描こう（4歳児）」「おとうさんの絵を描こう（5歳児）」において、まんてんカラーを使用している。すでに固形絵の具を使用している子どもたちは、絵の具の特徴を生かした絵画活動に取り掛かることができる。

３．空と海の絵画活動の流れと指導の方法

船を描く絵画活動は、①船を描く前日までに、背景の空と海を描く、②背景を描いた画用紙を使用して、港で実物の船を観察しながら、船の絵の下描きを描く、③園に戻り、自分が選んだ船の形状や色を思い出しながら彩色する、という流れで進められる。この活動で特に注目する点は、背景の空や海、船をよく観察することを通して、自然界の色を知ることである。

人は空や海の色を知っているか尋ねられると、「青」と答えるのが一般的である。しかし、人の目に映る空の青には幅がある。視線の角度や季節の違いによって澄んだ青から白っぽい青までの色の幅を認識することができる。空が青く見える理由は、レイリー散乱によるものである。レイリー散乱とは、光の波長より小さい酸素や窒素等の気体分子によって、青い光が強く散乱される現象のことであり、散乱された青い光が地表に届くことによって空が青く見える。

また、空の青が白っぽく見えるのは、光の波長と同程度の大きさを持つ水蒸気等の粒子によるミー散乱による。大気中に水蒸気や塵・埃等の不純物が多いと、全ての色が散乱して色が重なるため、空が白っぽくなるのである。春や夏は大気中の水蒸気量が多くなるため白っぽく、秋になると水蒸気量が減っていくため空が青くなりやすいのである。

小学校の図画工作の授業等では教師が「絵の具の生の色を使わずにほかの色を混ぜて色を作ると生き生きした絵になる」と指導することがあるが、それは目に見える色をそのまま表現するのでなく、知識による色を表現する傾向が強いからである。この傾向を何とかしたいと考える教師たちは絵の具の色をそのまま使わないこと、彩色に使用する色は混色により自分で作り出すこと等を指導すると考えられる。

ある保育園の園長からお聞きした話であるが、月や星の色を知っているか尋ねると3歳以上の子どもは「黄」と答える傾向が高く、3歳未満の子どもは「赤」「青」「白」「黒」等、様々な色を答えるという。その理由について、3歳以上の子どもは言葉と物を関連づけて認識する発達であり、その時期に大人が「月は黄」「太陽は赤」「空や海は青」と教育することが挙げられる。

実際に目に映る月の色は、季節や天候、時刻によって様々な色に見えるものである。前述の子どもの回答にある「赤」「白」「青」の月の色は、「赤っぽい」「青っぽい」という表現に変えると、ほとんどの人が納得できると考えられる。「黒」の月についてであるが、園長先生によれば、「子どもは夜になると空に月が出ると考えています。新月の日は夜になっても月を目にすることができないので、黒い月と表現しているのです。」とのことであった。このように、子どもは周りの環境にあるものや色をよく観察しており、気づきを自分が使用可能な言語で表現するということである。

A幼稚園では、一つの単語で表現する自然界の色について確認してもらいたいという考えから、日常的に色についての会話を行っている。船の絵の絵画活動における空の観察の方法は、子どもとともに園庭に出て、天を仰ぐことから始まる。

空についての会話や言葉がけによって、子どもたちは今まで気が付かなかったことを発見する。子どもは、自分の立ち位置の直上が最も濃いこと、自身の立ち位置から距離が離れた（地上に近い）空ほど、色が薄くなっていること等を認識するのである。さらに、港に行き海や船の観察の際には、海の色についての会話や言葉がけによって、海も空と同様に、自分に近い場所が最も濃く、遠くなればなるほど薄くなることを実感する。空や海の色に幅があること等を認識した後、空と海の色の彩色に進む。実際の描画の流れは以下の通りである（表2）。

まず、空の表現である。画用紙の上部から中部までをA、B、C、Dの4段に分け、青で彩色していく（図1）。Aに青の絵の具をひたした筆で横線を引くように彩色し、空の観察で認識した直上の色を表現する。直上の青を彩色した筆をそのまま水を張った筆洗に一度浸し、筆に水分を含ませる。その筆でBの位置に横線を引くように彩色する。水分を加えることによって、Aの個所に彩色した直上の青よりも薄い色を表現することができる。同様の工程を繰り返し、地上に近づくにつれて白っぽくなる空の青の幅を表現する。

表１　船の絵を描こうの指導案

活動名　船の絵を描こう(線描き)　　6月27日　(月)　　５歳児　３６名

認定こども園　A幼稚園

子どもの姿	○自分の見たもの、好きなものを絵で表現することを楽しんでいる。 ○まんてんカラー(絵の具)やクレパス、カラーマジック等様々な道具を自ら用いて表現している。	ねらい	○描き始めを決めて、隣り隣りと見た通り描くと、自然とかけてしまうことを体験する。 ○部品、付属品を知ることで、大抵のものは描けてしまうことを知る。 ○船の特徴や仕組みに興味を持ち、絵にすることを楽しむ。

時間	環境構成	幼児の予想される活動	保育者の援助と配慮
9:30		○バスに乗り、船を見に行く。	○子どもの健康状態を把握し、事故や怪我無く活動できるようにする。 ○事前に岸壁には近づかないこと、保育者の見えない場所にはいかないことをクラスで確認し、安全に活動できるようにする(海は深い、はまると助けられない)
9:45	○園に帰ってからも見たものを思い出せるよう船の写真を撮っておく。	○観察する。 ・船を見る。 ・海や空の様子を見る。	○船を近くで見られる場所へ行き、様々な形の船があることに気が付ける声掛けをする。 ○アンテナや船のボディに付いているタイヤの意味などについて船を見ながら話し、興味関心が持てるようにする。
10:00	○ブルーシートを敷き、その上に画版やクレパスを子どもたちが準備できるようにする。 〈準備物〉 ブルーシート、画板、画用紙(子どもたちが海と空を塗ったもの、クレパス黒１本、手拭き、カメラ、水筒、帽子	○船の絵を描く。 ・画版、クレパスの準備をする。 ・園長先生が描く様子を見る。 ・描きたい船を決める。 ・船を描く。	○描き始め(アンテナ)を決め、そこから広げて描いていく方法があることを伝えやって見せる。○画用紙の上下が合っているか確認する。 ○集中して取り組んでいる子どもには静かに見守る。 ○どう描いたらよいか迷っている子どもには、観察中にどんなところを見たか思い出せるような声掛けをし、絵にしていけるよう促す。 ○取り組もうとしている姿を認め、無理強いはせず安心して活動できるようにする。
10:30		○片づけをする。 ・自分の絵を保育者のところへ持ってくる ・手拭きで手を拭く。	○完成しなかった子どもには、「園に帰ったら、図鑑や写真をみて描いてみよう。」と声をかけ、焦って描く必要はないことを伝える。
10:40		○バスに乗り、園へ帰る。 ・水分補給をする。	・子ども一人ひとりの頑張りを認め、いいなと思う点を積極的に言葉で伝えていく。

表２　空と海の描画の流れ

①画用紙を横長方形に置く
②空の表現
　画用紙上部から中央までを、A、B、C、Dの4段に分け彩色する。
A　絵の具　筆を青色に浸し、一番上端に横線を左端から右端へ引く。
B　その筆を1回水につけ、先程の青色の線の下に線を引く。（青が薄くなる。）
C　その筆をもう1回水につけ、先程の青色の線の下に線を引く。（さらに青が薄くなる。）
D　その筆をさらに1回水につけ、先程の青色の線の下に線を引く。（さらに青が薄くなる。）
　― 中央まできたら、一度筆をきれいに洗う。―
③海の表現
　画用紙下部から中央までを、a、b、cの3段に分け彩色する。
a　絵の具　筆を緑色に浸し、一番下端に横線を左端から右端へ引く。
b　その筆を1回水につけ、先程の緑色の上に線を引く。（緑が薄くなる。）
c　中央まで繰り返し、中央までトーンの違う色の線で彩色する。
（さらに薄くしていく。）
― 背景の絵の具を乾かして、画用紙裏に氏名を描き、提出する。―

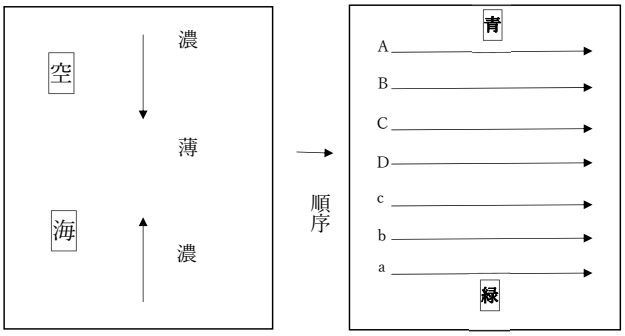

図１　空と海の彩色の手順

子どもたちには、行程の説明をしながら、各過程で彩色した色の違いに気が付き、全員で観察し認識した空の色を表現可能なことを認識できるように言葉がけを行う。自分で空の色の幅を表現できる方法を理解した子どもは夢中になって彩色を繰り返すのである。空の色が完成した後は同様の方法で彩色することによって、海の色の濃淡を表現する。完成した空と海の背景を乾燥後に提出する子どもの表情には、やり切ったという自信が現れるとのことである。

４．船の絵画活動の流れと指導の方法

空と海で構成された背景の絵画活動の後は、実際に港に行き、船を観察しながら描く活動へと移行する。園外での活動、特に、危険の多い海での活動となるため、子どもの健康状態を把握し、事故や怪我のない活動にするよう細心の注意を払っている。子どもは興味のあるものを目にすると、周囲の確認をせずに行動することを想定し、岸壁に近づかないこと、保育者の見えない場所に行かないこと等をクラスで確認し、安全に活動できるようにしている。

まず、船の観察をするため、船を近くで見ることが可能な場所へ行き、様々な形や色の船があることに気が付くように言葉がけを行う。例えば、船のアンテナや船体側面にあるタイヤの意味等について船を見ながら話し、興味関心を引き出すように指導を行う。船の観察中に園長が子どもに伝える内容は、次のとおりである（表3）。

表３　船の描画の流れ（下描き）

・人が落ちない為の「手すり」がデッキの周囲にあるよ。
・人が出入りする「ドア」や「窓」があるね。
・船が遠くへ行かない為の「錨(いかり)」と「ロープ」があるよ。
・船が防波堤に当たっても傷まないように、船に「タイヤ」がくっついているよ。
・「アンテナ」で船の位置を知らせ、困ったときには連絡できるようになっているよ。

描きたい船が決まったら、どこから描き始めるかを決める。
(これまでの活動の経験からアンテナからが描きやすいことが分かっている。)
描画の出発点が決まれば、その横、またその横へと広げて描いていく方法があることを伝えながら、園長が実際に描いて見せ、子どもが絵画活動に移行しやすいよう配慮する。
〈松本キミ子方式の活用。お父さんの絵でも使用した方法。〉

描き始めを船のアンテナと決め、そこから隣へ広げて描くこと、お父さんの絵の活動で経験済みであること等を伝えると、子どもはオイルクレヨンを用いて自分が選んだ船の形を描いていく（写真1）。船の観察の時間に保育士との会話を通して観察し、自分が気に入って描くことに決めた船であるため、絵画活動に没頭する子どもがほとんどである。描いた船が小さい子どもには、もう一隻描くことを勧める。

構図が整わない小さい船を描いてしまう子どもには、もう一隻の船を追加して描くことを勧めている。キミ子方式

では小さい絵を描いた場合には、子どもの絵が中心となるように画用紙の方を切り、構図を整える方法を取る。A幼稚園の絵画活動においてもその方法を取ることが多いが、船の絵に関しては、あえて画用紙全面を子どもの絵で構成するように試みている。それは、目の前の画用紙一杯に自分の描画が及ぶ嬉しさや心地よさ、やり切ったという自信等を味わってもらうためである。

どの様に描画したらよいかを迷う子どもに対しては、観察中に何があったか、どんなところに気が付いたか等を思い出しながら活動できるような言葉がけを行い、描画できるように指導する。また、必死に取り組もうとする姿を認め、無理強いをしない指導によって、子どもは安心して絵画活動に入っていく。船の下描きが完成していく中、完成しなかった子どもには、「園に帰ったら、図鑑や写真をみて描いてみよう。」といった言葉がけを行い、焦って描く必要がないことを伝えるよう配慮している。

最後に、子ども一人ひとりの頑張りを認め褒めるとともに、作品の素晴らしい点について積極的に言葉を通して伝え、港での絵画活動は終了する。下描きの後は園に戻り、別日に船の絵に彩色を行う。下描きが未完成の子どもは、港で見た船に関する保育者との会話と撮影した写真の確認を通して下描きを完成させ、彩色の活動に移行し、作品を完成させる。

完成した船の絵（写真2）の背景に着目すると、空や海の濃い色に個人差があることが分かる。キミ子方式にあるように、観察したモデルを感じたままに自分の色で彩色する指導によるものであり、子どもの感受性を重視していることが分かる。また、出発点を決め、観察しながら隣へ描き進めるキミ子方式の活用と子ども個人に対応した言葉がけ、子どもの頑張りを認める指導方法によって、全員の絵が生き生きと、また、堂々としており、素晴らしい作品と評価できる。

写真１　船の絵画活動の様子

写真２　完成した船の絵

５．子どもの個性や進度に対応した絵画活動の留意点

A幼稚園が船の絵画活動において留意している点は、子どもがこれまでに経験している、鳥の絵を描く活動やお父さんの絵を描く活動と同様に、①時間内に終わらせるのではなく、個別のペースで活動できるよう時間を作ること、②日を変えて、何度も挑戦できる環境を用意すること、③手が止まってしまう子どもには子どもの困難を聞き出しサポートすること、④物の大きさや形に気が付くような言葉がけを重視すること、⑤時には保育者も子どもとともに絵を描くこと、である。

絵画活動のモデルを観察し、形や物理的な構造等を理解すること、様々な色の存在や違いに気付くこと、描画を描き進めること等、絵画活動には様々な行程があり、その理解力や表現力、興味・関心等は子どもによって様々である。

そのような個々の子どもの考えや行動を尊重した絵画活動を無理なく、子どものペースに合わせて取り組むために、時間内に完成させなくてもよいこと、子ども自身が再開したい時に活動し作品を完成させればよいこと、描画に嫌気がささないように、仕上げを急ぐ必要がないこと等、子どもの状態に合わせた指導に留意している。

また、日を変えながら何度も挑戦できる方法であるが、船の絵画活動に関しては、空と海の観察、空と海の表現、船の観察、船の下描き、船の彩色、と複数の行程を継続していく活動であり、活動全体にかかる時間も長期にわたる。そのため、時間内に完成させることができない子どもに対する配慮に加え、子どもの活動への意欲や関心の継続を途絶えることのないように配慮する必要がある。そのために、自然や物の観察における会話の内容、方法等に子どもの気づきが繰り返される様な工夫と振り返り、改善を行っている。

この様な指導は、子どもの心に寄り添い、自分が感じた通りに表現してよいというキミ子方式に通ずる指導方法であり、子どもの心と表現を大切に取り扱う指導方法と考えられる。

手が止まってしまう子どもには、「先生は船の窓を描こうかな。Y君も描いてみるかな。」「ここ、難しいね。どうなっているのかな。」「次はどこ描きたい。」等の会話をしながら、モデルの観察のポイントや発見を促し、活動を

継続できるように指導を行っている。船の下描きが完成しない子どもには、後日再開して描画すればよいこと、モデルを写真で記録しそれを見て確認可能なこと等、子どもが安心できる内容を提示し、焦る必要がないことを伝えるよう配慮している。

また、絵が小さくなってしまう子どもに対しては、「船ってどんな大きさかな。何人くらい乗れそうかな。」等、船の大きさを想定可能な言葉がけや小さな船の隣に別の船を追加することを提案し、画面構成のバランスが取れるように指導を行っている。大きさを比較可能な対象が身近にあること、複数の船を描く方法もあること等に気が付くと、子どもたちの描画は充実した画面を構成させることが可能と考えられる。

最後の留意点は、保育者も子どもとともに絵を描き、子どもと同じペースで描画を行う機会を作ることである。「先生は○○を描こうかな。T君も描いてみるかな。」「ここ、難しいね。どうなっているのかな。」「次はどこを描きたいのかな。」等、会話をしながら取り組むことによって、子どもの方から徐々に「こうしたい」という感情が芽生えるようである。

6．考察

A幼稚園の絵画活動はキミ子方式を活用しているが、キミ子方式の「描き始めの基本」と異なる点が2点ある。

1点目は、オイルクレヨンを使用して下描きをすることである。キミ子方式の描画の基本では、描画は下描きをすることなく、絵の具を混色して自分の色を作り画用紙に直に描画することとしている。画用紙に塗られた色の隣の色や形を観察し、自分が感じた色を新たに作り隣へ隣へと描き進めることで、自然と全体を描き終えることができる。では、子どもの絵画活動において、下描きを描くことは避ける行程であろうか。

A幼稚園でキミ子方式を活用した絵画活動を行う子どもの年齢が、5歳児であることを忘れてはならない。子ども描画の発達において5歳の子どもの絵に現れる変化は、輪郭線で描くこと、場面を描くことであり、複数の形を連続した輪郭で一つにまとめた描き方が現れることである。また、何がどこにあるかを描く時期から、次第にどう見えるかを意識した描画に変化していく。子どもの絵の発達段階において重要な時期であり、下描きを描く時間を充分に用意する必要があると考えられる。

つまり、5歳児の子どもがオイルクレヨンで輪郭を描くことは、子どもに無理なく絵画活動を楽しませること、子どもの描画の発達段階に適した絵画活動となることから、5歳児の絵画活動の自由を認めることになり、子どもの優れた絵画活動を展開するために、A幼稚園の子どもの特性とキミ子方式の指導法上手く融合させた、優れた取り組みと考えられる。

2点目は、A幼稚園の絵画活動で12色の固形絵の具を使用することである。キミ子方式では使用する絵の具をチューブからパレットに絞り出した、赤・黄・青・白の4色に限定しており、それらを混色することで新しい色が生まれること、色の美しさに気付くこと、色の分量の違いによって色のトーンに差が出ることを子どもが知ることができる。その経験と知識を活かし、子どもが自分の色を作り彩色することによって複雑な色合いを持った作品となる。

しかし、絵の具をチューブから必要量絞り出し筆を自在に操り混色することは、5歳児にとっては困難な作業である。固形絵の具は筆の水で絵の具を溶かして色を取り出す画材であり、筆で絵の具の表面をこする回数によって色が濃くなる、という仕組みである。一度に多くの絵の具が溶けることもなく、子どもでも簡単に色のトーンを生み出すことが可能となる。また、固形絵の具が固定された容器自体がパレットの役割を担い、片付け等が簡単なことから、幼児に適した画材といえる。また、固形絵の具を幼児の絵画活動に使用する計画は、子どもの発達段階を重視した方法であると考えられる。

指導においては、空と海の絵画活動で見られるように自然の観察を取り入れ、空や海の話をしながら、空の青や海の緑に色の幅があること等、周りの環境に溢れる色には幅があり、その中から感じた色を絵の具で作ればよいことを子どもに知らせ、発見や感動を味舞うことが可能な工夫がみられる。また、その発見を絵の具で表現する方法を適切な言葉がけや指導によって子どもに伝え、自分の色が表出された空と海を完成するように導いている。

船を観察し描画する絵画活動では、実際の船を目の前にしながら船の細部にまで気が付く指導を行い、下描き、彩色を個々のペースを尊重することによって、子どもが納得して完成可能な体制を築いている。

このように、子どもの活動のペースを重視した体制を整え、子どもの意思に任せて完成までの活動回数や時間を調整できること、子どもの困難に寄り添い会話を通して悩みや不安を引き出しその対策方法を援助すること、子どもの気づきや気持ちを共有し、一緒になって作品を完成させること等、言葉がけや細かい配慮が計画的に配置されていた。子どもの意思を尊重して作品を仕上げる方法は、長時間の活動で疲れや嫌気がでない活動の体制を整えることにつながっている。

A幼稚園の絵画活動には、キミ子方式を用いながら、それ指導内容や指導法をそのまま流用するのでなく、A幼稚園で生活する子どもの実情に合わせた指導法にうまくアレンジしている。その柔軟な考え方や指導計画、方法は、子どもの感動や発見、挑戦しやり遂げたという満足感や達成感を与えるとともに、子どもが気に入り納得した作品作りが可能となる。A幼稚園の指導内容は、子どもの心に寄り

添うキミ子方式のよさを活かした指導方法であり、それまで集中して子どもが描いた作品を大切に取り扱う指導方法と考えられる。

まとめ

本稿では、キミ子方式の出版物、キミ子方式に関する文献、キミ子方式を用いた絵画活動を実践するA幼稚園の「船の絵を描こう」の指導案、活動記録を用い、キミ子方式を用いた子どもの絵画活動の内容や方法、子どもの育ちについて考察した。

キミ子方式等の描画法を子どもの表現活動に生かすことは、画一的な作品や個性のない作品を生む可能性があるものの、子どもの実態に沿うことに重点を置いた計画的な指導案や体制づくりによって、作品に自由を与えることも可能であることが分かった。また、子どもの感動や発見、満足感等を与える活動となることも分かった。

今後は、A幼稚園の指導内容や方法をさらに詳細に分析し、子どもの実態に即した指導の内容や方法の在り方について考察することを継続したい。

謝辞

本稿のために子どもの造形表現の活動記録をご提供下さった、泉幼稚園の保育者の皆様に感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

文献

1）島田由紀子：幼児、児童のメソッドによる描画指導法の研究. 和洋女子大学紀要第57集　87－96，2017.
2）松本昭彦：キミ子方式と大学生. 愛知教育大学実践総合センター紀要第８号，pp.189-196，2005
3）松本昭彦・金由悧：キミ子方式の応用題材に関する研究―応用題材開発の可能性について―. 愛知教育大学教育創造開発機構紀要vol.2，pp.29-36，2012
4）松本昭彦, キミ子方式と創造画. 愛知教育大学教育実践センター紀要, 第13号，pp.139-146，2010
5）高橋敏之：図画工作・美術科教育における展覧会及びコンクールの意味と絵画指導の問題点. 美術教育学(24), pp.197-209, 2003
6）たのしい授業編集委員会：だれでも描けるキミ子方式・たのしみ方・教え方入門. 仮説社，1944
7）松本キミ子：キミ子方式宇宙のものみんな描いちゃおう―植物・動物・人工物の描き方. 太郎次郎社エディタス，1987
8）松本キミ子：三原色で描く四季の草花―松本キミ子のフィールドノート誰でも本物ソックリの絵が描ける画期的絵画入門の本. 日貿出版社，2010
9）松本キミ子：キミ子方式スケッチ入門　逆転の発想で誰でも絵が描ける. JTBキャンブックス，2001
10）松本一郎：はじめてでも楽しみながら絵が描ける―キミ子方式によるアートセラピー. 生活ジャーナル，2002
11）キミ子方式公式HP/キミ子プラン・ドゥ：http://www.kimiko-method.com/，2022.6.10.オンラインアクセス